

変容しつつ寄り添う住生活の〈モノ〉

—「住」教材化への一視点—

生活環境デザイン学科 高阪 謙次

1. 家庭科「住」領域考

家庭科のような実学を教える際に肝要なことは、生徒の共通的な興味や体験にもとづき、具体的な教材・教具を目の前に展開し、そして学習の成果を家庭生活に還元してゆく、というスタンスであろう。

この共通体験・眼前展開・生活化が、「衣」や「食」は比較的容易であるのに対して、「住」は、はっきり言って難しい。加えて教師の側でも、「住」に関する知識や体験は十人十色であり、共通的な教育プログラムが成り立ちにくいという状況がある。

ならば「住」領域は止めてしまったらとも思うのだが、そうはいかない。

「住」は家庭生活を円滑に運び、豊かにしてゆく上で欠かせぬ要素であるからである。「住」が貧しいと、知らず知らずのうちに子供の成長が阻害され、家族関係が破壊されてしまう。だから家庭科には、少なくともそうした認識が生徒側に育まれてゆくための手立てが求められている。

その手立ては、一体どうしたら良いのであろうか。

住まいは、食う・寝る・遊ぶ、の場と言っていい。〈食う〉すなわち家族が揃って楽しく食事をする場、〈寝る〉すなわち父母、子供たち、時には祖父母が、そのライフステージにふさわしく寝たり、私生活を送ったりする場、そして〈遊ぶ〉すなわち家族の遊びや団欒の場である。この三つの機能の「場」は、生徒によっては家庭で確立されていなかったり、あったとしてもその内容に問題があったりで、多くの課題が含まれている。

「食」の場合、最近の「食育」の運動にも見られるように、健全な食生活のための教育プログラムが形成されてきている。その成果は家庭科にも反映されつつある。朝食の大切さ、栄養バランスの取り方、無理なダイエットの危険性、ジャンクフードの問題点などなど、共通体験・眼前展開・生活化のしやすいプログラムの可能性が目白押しである。

これに対し「住」は、団欒の場と言える空間が無いとか、子供のための私的な空間が無い、あったとしても「閉じこもり」を助長するような閉ざされた子供室になっている等々、家庭が解決しなければならない課題は、実は山のようにある。それにも関わらず、それを家庭科などにおいて、共通体験・眼前展開・生活化のスタンスで教材化することが難しいのである。

その最大の原因は、多少ともまとまな住空間の確保が、個別の親の「甲斐性」「経済力」に任されてしまっているという、日本的な事情にあるであろう。

親子四人が6畳ひと間のアパートで暮らしても、誰も罰せられないし、誰も助けてくれない。こうした実情を何とかしなければならぬと、マスコミなどで取り上げられること

もほとんどない。

そのような住まいでは、子供室はおろか、子供机すら置く余裕がない。そのような子供もいるから、特に都市部の学校では、子供机をめぐることすらが、家庭科の共通体験教材になりにくいのである。

ならば住領域の教育の手立ては絶望的かということ、そうではないように思う。

きっかけになる教材の一つは、〈生活に寄り添うモノ〉に生徒の目を開かせることである。その一端を本稿で述べたい。住生活の個々の場面は、モノによって支えられており、それが実に面白い役割を果たしている。このことに生徒の目を開かせることが出来れば、住領域の教育プログラムを、もっと活き活きと展開させることができるであろう。そのためには、「教師の目」もそうした方向で見開く必要があるのであるが。

もう一つ考えられる教材は、〈モノの置き方・飾り方・収納のあり方〉への着眼である。住まいは、家族関係や家庭生活の容器である。

この容器の出来具合によって、家族の関係や家庭生活は大きく影響されている。ところがこの影響の度合いは、なかなか証明しにくい。たとえば「食」の場合、食べ物による人体への影響は短時日に現れてきて、本人もそれを意識しやすい。それに対して「住」の影響は、大変分りにくく、データ化もしにくいのである。

このように、家族関係や家庭生活のレベルにまで住まいの影響を引き上げてしまうと、「住」は、教師にとってさえ理解困難な代物になってしまう。ましてやそれを生徒に教育しようとした場合、一般論としては展開できたとしても、共通体験・眼前展開・生活化の視点でと考えると、とても困難である。

だから、〈モノ〉のレベルに着眼を変えたらどうであろうか、というのが提案である。

住まいは、われわれの生活に必要な「モノの容器」でもある。

モノの〈置き方・飾り方・収納のあり方〉は、どの生徒も共通して体験し、目の前に展開され、すぐに誰でも改善に手を付けられるテーマである。また教師にとっても、理解と準備の容易なテーマである。しかも、「住」という奥深い領域への入口として、小中高の発達段階に見合い、かつ一生逃れることのできないテーマでもある。

具体的な展開の仕方については、それこそ本屋に行けば、この手の情報はたっぷりとあるであろう。そこからエキスを抽出し、身近な教材・教具と関連させて授業展開すれば、いくらでも可能性は広がると思うのだが、どうであろうか。

2. 住まいの中での足元考—スリッパの話など—

年に二度ほど高校を訪れる。教育実習でお世話になっている学生を「巡回指導」という形での表敬訪問や、このごろ流行の「出張講義」などによってである。その折に最近立て続けに、同じ場面で、同じ困った事態に見舞われた。

訪ねた高校の玄関で、靴から来客用のスリッパに履き替えた後のことである。廊下を歩いている内はまだ良かったのだが、階段を昇り降りする時に、そのスリッパが足から脱げそうになるのである。どうしてもスリッパが足に馴染もうとせず、足、スリッパ、階段の、

三者の仲がととも悪くなる。ついには実際に脱げてしまって、スリッパは下の段に落ち、足は上の段の踏面に、ということも先だってあった。

この原因は、靴下とスリッパの素材の相性が悪く、滑りやすくなっている事であろう。考えるに、高校の玄関の来客用スリッパは近年、ビニル系素材で作られているものを用意することが多いらしい。掃除がしやすく、清潔感が長続きするからであろう。ところがこの手のスリッパは、裸足との相性は良いのだが、靴下履きの足になると、途端にスルスルと歩きにくくなってしまう。まさに〈スリッパする履物〉になるのである。

高校への来客は、ほぼすべてが靴下を履いてやってくる。そのお客さんの多くが、おそらくこのような体験をさせられているであろうと考えると、何か滑稽な実験に参加させられているような話でもある。

さてこのスリッパという代物は、明治の初期に、西洋人が日本での〈脱沓・上床生活〉に適應するために産み出されたものであるという。

日本人はその頃、草鞋(わらじ)や草履、雪踏(せった)などを土間で脱ぎ、裸足または足袋(たび)履きで、畳や板床に上がって生活した。しかし西洋の住宅では、人は靴履きのまま住宅の中でも生活をし、寝る時になって靴を脱ぐ。このように生活様式の違う西洋人を、日本の住宅に適應させるために考案されたのが、わが国での〈スリッパ〉の始まりであるらしい。

それ以来百数十年、今やスリッパは西洋人向けというのではなく、わが国のほとんどの家庭に一足はあるというほどに普及した。公共の施設などにおいても、土足禁止の場所では、靴を脱ぐ所にスリッパを用意するのが通例になっている。

このように、もはや日本人の生活に十分に溶け込んだかに見えるスリッパだが、案外その住まいにおいては、安定的な居場所を得ていないのが実情のようである。

そのことは、誰かの住まいを訪ねた折に、誰もが感じることである。

まず玄関先にスリッパが用意されているかどうかである。随分以前の事だが、1994年に私の研究室で、椋山女学園大学の学生(女子)の家庭を対象に、スリッパの調査を行ったことがある(以下「スリッパ調査」と略す)。それによると、来客用スリッパのある家庭は83%であった。そのうち来客に「いつも出す」が37%、「時々出す」が54%であった。改まった客には、およそスリッパを出している、と見ても良い。客はそれを履いて、住まいの中に導かれる。

和室間に通される場合、その手前で誰もがスリッパを脱ぐであろう。まさか畳の上にスリッパ履きで上がるようなことはあるまい。日本人の足裏感覚や畳という素材の感覚がそれを許さないからである。ところが小学生ぐらいまでの子供や、大人でも一部は、スタスタとスリッパで畳に上がってしまうことも、時にはある。

判断に困るのは、カーペットのある部屋に通される時である。パンチカーペットの場合は、スリッパ履きのまま上がることが多い。それが普通であろう。ところが毛足の長いカーペットの場合、これは部分敷きされていることが多いのだが、その手前でスリッパを脱ぐのかどうか迷ってしまう。脱ぐ方がどうも無難なようであるから、多くの客はそうしてい

る。しかし「スリッパを履いたままどうぞ」と言われる家庭もある。

このように客事の場合は、訪ねる側も迎える側も、スリッパを巡っては一種独特の緊張感と戸惑いがある。

それでは普段の家庭生活の中では、スリッパはどのような扱いになっているであろうか。それは実にさまざまな様相を呈している。

「スリッパ調査」では、学生（女子）の41%が夏冬ともに、基本的にスリッパの生活であることが分った。ほかは、夏については素足26%、靴下18%、冬は素足8%、靴下33%である。要するに、家庭においてスリッパ利用の女子学生は、およそ半分であった。しかし客間などの畳の部屋では、スリッパは履いていない。

同じ調査で、台所でのスリッパの着用率を、母、姉妹、父、兄弟について調べたのだが、母親は夏76%、冬90%に対し、姉妹は夏56%、冬64%、父親は夏55%、冬59%、兄弟は夏31%、冬41%という結果になった。20年も前の調査であり、この間ソックスカバーなども普及したので、今もこのままということではないであろうが、概して女性の方がスリッパを利用している傾向が窺える。この傾向は台所に限ったわけではなさそうである。

このように家庭生活における家族の足元は、裸足、裸足にスリッパ、靴下、靴下にスリッパ、靴下カバー、足袋などと一様ではなく、これがまたメンバーにより異なり、場所によって違い、そして季節によっても変動するというように、実にめまぐるしい様相を呈している。

加えて日本の住まいの床材は、無垢板床、フローリング材、畳、パンチカーペット、カーペット（毛足の長さが様々）、合成樹脂系やゴム系などの床材、タイルなど、こちらも多様である。

この「足元」と「床材」の多様で複雑な組み合わせに加え、一段と日本人の「足元生活」をややくしくしているのが、床の上にモノを置いて生活するという日本人の住生活様式である。特に床座をしている部屋の場合、床の上には、新聞、広告チラシ、買い物袋など様々なモノが置かれており、足元がさらに複雑になる。

このような足元の状態が、家庭内事故（年間死者1万人以上）の中での、高齢者の「平面上の転倒」の多さにつながっているのである。家庭科の中でも、こうした「足元問題」は、住まいと住み方を考える上で、是非見つめてみたい教材である。

3. バスタオル考—ビシヨ出の話—

日本の家庭での入浴様式が大きく変わってしまった。しかも家族構成員それぞれが、バラバラの入り方をしている。このことを私が初めて身をもって知ったのは十二年ほど前、結婚したばかりの長男の家に、旅行途中に泊めてもらった時のことである。

夕食前に長男宅に着いて、まずは風呂に入って下さいということになった。賃貸マンション定型の浴室に入ると、浴槽には湯が張ってある。ところが湯桶が見当たらない。片手桶があったので、それで掛け湯をして、湯に浸かった。そして石鹸で体を洗う段になって、はたと困ってしまった。湯桶が無いから、ボディタオルに石鹸を付ける作業が出来ない。

それでもなんとか入浴を終え、脱衣兼洗濯のスペースに出てまた驚いた。棚にバスタオルがうず高く積まれているのである。

風呂から出て、長男夫婦とビールを飲みながら、この話題で盛り上がった。そして、どうしてこうなっているのか、その背景が分かった。要するに長男夫婦は二人とも、浴槽に湯を張って入浴することはなく、一年中シャワーで済ませていたのである。だから湯桶は必要がないので置いていなかった。そしてシャワーの後、彼らはビショ濡れのまま脱衣室に出て、バスタオルで体を拭いて、それを洗濯機に入れる。だからバスタオルが沢山置いてあるのである。

この旅行から帰ってから、私は学生たちに聞いてみた。入浴後、ビショ濡れのまま脱衣室に出てバスタオルで体を拭く人—これに私は「ビショ出」と名付けた—はどれだけいるか。そうしたら、「ビショ出」が多数派であることが分かった。

私の学生時代すなわち半世紀ほど前は、そのような人は、まずいなかった。当時風呂から出る時は、浴室内で一旦、綿製ボディタオルで体を良くぬぐい、脱衣室に出てからもう一度、同じボディタオルを絞って体を拭く。そして服を着るのが普通であった。バスタオルはホテルなどでしか使われず、庶民の家庭生活には縁が薄かった。

それが今や、「バスタオル・ビショ出」が家庭を席捲するに至ったのである。その最初のきっかけは、1980年代半ばに大流行した「朝シャン」であったであろう。

資生堂のコマーシャルに端を発したこの言葉は、1987年の第4回新語・流行語大賞の新語部門・表現賞を「サラダ記念日」などと並んで受賞している。実際に当時は、女学生の多くが朝から洗い髪の匂いをさせ、艶やかな髪で登校してきたのを覚えている。

この「朝シャン」を可能にしたのは、一般家庭への給湯設備とシャワーの普及である。台所や浴室に始まった給湯設備は洗面所にまで延び、シャワーでの「朝シャン」は洗面槽の大型化を促した。そして洗髪後の必需品として登場したのがバスタオルである。朝、短時間で髪を拭き乾かすには、綿製ボディタオルは不都合で、バスタオルでなくてはならなかった。

今では「朝シャン」は、脱毛を促すという説もあり、少なくなったようである。しかし、この時出来上がったシャワー・バスタオルの組み合わせは、入浴と洗髪に欠かせないものとして残り、今や、中年以下の日本人の多くの入浴様式になったのである。

このようにして、脱衣室にバスタオルがうず高く積まれるといった、現代日本の浴室風景が生まれた。贈答品にもバスタオルが重宝されるといった「ビショ出文化」が出来上がったのである。

ところで、この大量のバスタオルを使う「文化」を支えた「モノ」がある。それは、大型化した洗濯機である。今では50リットルを超える大容量の洗濯機が普通である。これが無ければ、大量のバスタオルを日々洗濯できるものではない。

以上のことから、現代日本の入浴様式である「ビショ出」は、シャワー・バスタオル・大型洗濯機のトライアングルに支えられて存在していると言ってもよいであろう。ことによったら、浴槽というものが消える方向で浴室のあり方が変遷してゆく。そうした予感す

ら抱かせられる状況になっているのである。

日帰り温泉などに行った時に、それとなく若者を観察しているのだが、掛け湯をせずに入ったり、タオルで前を隠さずに歩いたり、脱衣室を「ビショ出」で歩いたり、浴室での行動の規範は、もはや継承されていないと感ずることが多い。それも無理からぬことであって、入浴や排泄などのプライベートな行為は、もともと継承されにくい行為である。それに加え、核家族化に伴う家庭の個別化もあって、親世代から継承されず成長してしまいがちな時代環境になっているのである。

そして、その親たちもどんどん変化し、多様化していつている。

この多様化しつつある実情を児童生徒に意識させるのも、家庭科の大切な仕事なのではなからうかと思うこの頃である。

4. おわりにかえてーキッチンゴミの話などー

住まいの設計の中で、案外見落とされているのが、キッチンゴミのことである。

キッチンゴミには、旧来の生ゴミ（量的には減ってきている）に加え、近年、発泡スチロール、プラスチックなどの包装系ゴミ、ペットボトル、缶、瓶などの容器系ゴミが増えつつきている。この包装系と容器系のゴミが、実は馬鹿にならない量でキッチン周りに蓄積されているのである。それに加え、自治体の可燃ゴミ・不燃ゴミの袋が積んであったりする。

こうしたことから、多くの家庭がこの大量のゴミの置き場に悩んでいる。住宅の設計段階においては多くの場合、このキッチンゴミの置き場のことを想定し、組み込むことはしていないのが現状である。だから、日本の多くの家庭で、ただでさえ狭いキッチン空間にこれらのゴミがズラリと置かれるという状況になっているのである。

以上見てきたように、住生活の内実は時代とともにダイナミックに変容しており、児童生徒たちはそうした住まいの中で生活し、成長している。最初に述べたが、「衣」「食」は表に出やすいから把握しやすく教材にもしやすい。しかし「住」はその点、難しさがある。とはいえ、〈モノ〉の中にある教材を、共通体験・眼前展開・生活化の視点で見出していけば、「住」においても豊かな教育展開ができるはずである。

そうした教材の一例として、スリッパ、バスタオル、そしてキッチンゴミという話題を提供してきた。加えて、モノの置き方・飾り方・収納のことも、教材展開が大いに可能なテーマであろう。

これらの話題が、教育現場で何らかの役に立てば幸いである。